

高校時代になぜ第2外国語を学ぶのか ——日比谷高等学校のハングル授業を中心として——

武井 一

東京都立日比谷高等学校

はじめに

筆者は非常勤講師として、平成3年より東京都立日比谷高等学校(以下日比谷高校)に勤務している。地歴・公民科に所属し、「政治経済」「現代社会」を担当しているが¹、年度によって「地理」など他の科目を教えることもある。

平成13年度より外国語科目として韓国語も教えている。高校生を中心とする韓国語教育普及のための「ハングル@ホームステイ」の制作にも関わった²。韓国語は初めの3年間は臨時免許で教えたが、平成15年に高校の外国語の教員免許(韓国語)を取得した。授業は語学を軸にしながら、地歴・公民科の観点を加味したものを心がけており、広い意味の文化理解と平行して韓国語を学べるようにしている。

高等学校で履修できる外国語は英語だけではない。学習指導要領によれば外国語は1科目選択すればよく、その内容は英語に準ずることとなっている。この場合、英語に代わる外国語という位置づけになるが、実際はほとんどの学校で英語が選択されている。

ところが、英語の履修を前提として、さらにもう1つの外国語を履修できるようにしている学校が多くあり、90年代に入って増加している³。韓国語を教えている学校も少なくない⁴。日比谷高校でも英語だけでなく、フランス語・ドイツ語・中国語・韓国語の講座を教養科目として開講している⁵。これらは「第2外国語」と呼ばれることが多い。学習指導要領上そのような科目があるわけではなく、慣習上そう呼んでいるだけである。日比谷高校でも「外国語」として扱っているが、事実上は英語が「第1外国語」で、それ以外の言語は「第2外国語」として扱われている。そこで、本稿でもこのような科目を「第2外国語」と呼ぶこととする。

日比谷高校のように大学への進学者が多い学校で、なぜ第2外国語をおくのだろうか。いわゆる「進学校」では、「受験に関係ない」「生徒の負担が大きい」という理由で開講されなかったり、第2外国語の導入を検討することすらない。なのに、日比谷高校では第2外国語を「特色ある科目」として長年開講してきた。当然、開講するだけの意味がある

1. 「政治経済」(3年次必修 2単位)、「現代社会演習」(3年次自由選択 2単位 学校設定科目)

2. 「ハングル@ホームステイ」(共著 高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク東ブロック 白帝社 平成17年)

3. アラビア語やスペイン語などを含む多様な言語が開講されているが、多くの高校では、中国語、フランス語、韓国語、ドイツ語の4言語のいくつかを開講している。

4. 国際文化フォーラムの調査によれば、2005年度全国5403校の高校のうち、第2外国語の開講数は中国語(553校)、韓国語(286校)、フランス語(248校)、ドイツ語(105校)である。

5. 日比谷高校では、講座名を「ハングル」としている、本稿では隣国の言語名を韓国語とする。

からだし、教育効果もあるからだが、これまで第2外国語を学ぶ意味について十分検討されたことは必ずしも多くないように思う⁶。

そこで、実際に第2外国語を受講していた卒業生にインタビューすることで、生徒の目線から高校時代に第2外国語を学ぶ意味を考えたいと思った。対象は筆者が授業を担当したハングルの受講生とした。ハングルが開講されて10年目になることから、ハングル自体の意義も検討したかった。以下の内容の多くは第2外国語のすべてにも当てはまると思う。

インタビューしたのは大学生10名(4月に大学に入学する2人を含む)である⁷。最初に教えた生徒がこの4月に社会人になる。これまで教えた生徒のほぼ1割にあたり、ある程度の傾向はつかめたと思う。ただし、全く違った意見を持っている履修者もいたであろうし、社会人になるとまた違った感想を持つかもしれない。これらは別の機会に追跡したい。対面式インタビューのため、批判的なことを言いにくかったかもしれない。なお、分析は、筆者が主に担当している地歴・公民科の視点に基づく部分が少なくない。外国語を単なる言語としてとらえるのではなく、それが内包する歴史や文化を含めてとらえたいからである。

本稿を通じて、「第2外国語」が「外国語」という科目をこえて広い範囲に影響を与えること、通常の学習活動に影響を与えることを明らかにできたと思う。教養科目としておかれることの多い「第2外国語」であるが、それを学ぶ意義は、単に「もう一つの語学」「教養としての語学」だけにあるのではないというのが本稿の仮説である。そのことがまさしく高等学校の「第2外国語」の存在意義であり、ひるがえって教養を学ぶことの重要さだと思われる⁸。いわば「教養としての第2外国語」である。

第1章 日比谷高校の第2外国語

日比谷高校は全日制普通科の高等学校で、平成7年度より1学年8クラス、定員320人である。卒業生はほぼ全員が大学へ進学している。平成13年9月に東京都の進学指導重点校に指定され、進学指導を充実させる一方で、社会に出て知識を活かすためには幅広い教養も必要との観点から、個々の生徒の受験科目に偏らないカリキュラム編成をしている。2年次までは文系、理系などの進路別のコースとしないで全員が共通に同一科目を履修する。地歴、公民、理科の通常なら選択科目とする科目も選択科目とせずに全科目履修する。行事⁹、部活動も盛んで、部活動の加入率は90%を超える。

第2外国語はドイツ語・フランス語・中国語・ハングルがおかれている。2年次の自由

6. 西澤俊幸「ハングルの授業はいつもちょっぴりドキドキ」(2005年読書教育賞受賞作品)参照

7. インタビューできた人の受講年は次の通りである。平成13年度(男1,女1),平成14年度(男1,女1),平成15年(男3),平成16年(男1,女2)。

8. 平成元年の学習指導要領から第2外国語の単位数も卒業単位数に含められるようになった。

9. 体育祭(5月)、合唱祭(6月)、星陵祭(文化祭9月)。行事は前期にまとめられる。

選択科目で、それぞれ2単位(週2時間 通年)、1講座である¹⁰。自由選択科目であるため受講しなくともよい。授業は2時間連続で行われる。通常の授業は1時間目から7時間目に行われるため、自由選択科目は8、9時間目におかれる。これは部活動と同じ時間帯である。

なお、日比谷高校は前後期の2期制で、前期が4月から9月、後期が10月から翌年3月で、10月を境として年間の行事などが組まれている。

【日比谷高校の第2外国語の歩み】

日比谷高校の第2外国語の導入は早く、新制高等学校の発足後すぐの昭和25年にドイツ語・フランス語が設置(2年次のため開講は26年から)された。中国語も昭和31年に開講したが、履修者が減少したため昭和45年に休講となり、48年にはカリキュラム表からも削除された。その後しばらく復活の動きはなく、中国語の存在すら忘れられていた。

昭和50年代まではドイツ語やフランス語を利用して大学受験する生徒もいた。この頃の在校生で、英語よりもドイツ語の方が得意だった人を実際に知っている。その関係もあって、ドイツ語・フランス語は3年次対象の講座(ドイツ語・フランス語)も昭和58年まで開講していた(中国語は昭和45年まで)。その後2年次対象のドイツ語・フランス語だけ置かれていたが、平成9年に中国語とハングルが加わり現在に至っている。大学の第2外国語が長いことドイツ語・フランス語中心だったことも影響しているのであろう。ヨーロッパ語が中心であった日比谷高校の第2外国語にアジア言語が加えられたことは画期的なことであった。

なお、大学入試センター試験(共通一次試験を含む)では当初からドイツ語・フランス語が選択できた。その後中国語(平成9年1月入試から)、韓国語(平成14年1月入試から)が導入されたが、これらの言語を選択する生徒は近年では皆無である。これはセンター試験が学習指導要領上の「外国語」の選択科目として行われるために英語と同等の学力水準が求められることと、大学側がセンター試験での英語受験を求めることがある。本試験で英語以外の言語で受験できる大学が少なく、多くの生徒にとってこれらの言語で受験しても利益にはならない¹¹。現状では、高校で教えられている英語以外の外国語は、センター試験とはほとんど関係ないものとして扱われている。第2外国語に対するきちんとした位置づけが与えられていないからである¹²。

それにもかかわらず、日比谷高校においてフランス語・ドイツ語・中国語・韓国語の講

10. 1,2年次の自由選択科目は、第2外国語の他にオーラルコミュニケーション、数学演習、
(前後期各1単位)がある。

11. 平成19年度センター試験の外国語の受験者数は英語(520,048)、ドイツ語(102)、フランス語(149)、
中国語(372)、韓国語(213)である。(大学入試センター資料)

12. 韓国では高校で英語とそれ以外の外国語の2科目を学ぶようになっている。学習指導要領にあたる教育課程で、第2外国語も言語ごとに学習の目標、進度、標準語彙数が定められている。センター試験にあたる大学修学能力試験でも、これに合わせて問題が作成される。

座を今日まで継続していて、学校のホームページなどでも存在をアピールしている¹³。教養も必要であるという学校の方針があるからだ。生徒も毎年4言語全体で50人以上受講する。これは学年の15%近い人数である。かなりの人数が何らかの第2外国語を学んで卒業していくのだ。ここまで第2外国語を続けてきた実績が、高校教育において第2外国語の位置づけを考えるために大いに参考になるように思う。

【中国語、ハングルの導入】

「韓国語と中国語を第2外国語に入れようと思う。うまくいくかはわからないが」。平成8年の後期が始まったばかりであった。国語科の教諭¹⁴が筆者にそう語った。かねてから韓国語の講座もあればいいとは漠然と考えていたが、それまで校内ではヨーロッパ語重視の流れが強く講座の開設には否定的であった。そのことを知っている筆者にとっては驚きであった。それも外国語科ではなく国語科から話が出たのである。

9月に行われた職員旅行で、中国語の必修クラブを作ろうという動きがあることを知ったこの教諭は、必修クラブでなく授業にした方がよいと考えたという。その際にハングルも一緒に開講したいと考えた。かねてから韓国から来た韓国人や在日の生徒を担当して考えてきたことだった。

このとき必修クラブにしていたら、現在のように日比谷高校で中国語・韓国語を教える機会はなくなっていただろう。現行の学習指導要領ではクラブに関する記述がなくなっていて、日比谷高校でも必修クラブは置かれていないからである。

「本当は修学旅行で韓国へ行ってほしい。日比谷高校の生徒ならばそこから得るものは大きい。単に旅行に行ったということ以上の影響がある」。まだ東京都では海外の修学旅行が認められていない時であった¹⁵。しかしこの教諭は筆者との雑談でしばしばこう話していた。筆者に韓国人の友人が多いことを知っていたからだ。

しかし教務の担当者からは「開講には数年かかる。東京都の許可もすぐには下りない」と言っていた。通常、ハングルのような講座を新たに作るためには数年かかる。他の教員の同意がなかなか得られないからだ。先送りになり話そのものがなくなること多い。しかし講座の開設が職員会議で提案されると、予想に反してあっさりと開講が決まってしまった。

日比谷高校に第2外国語の伝統があったからだけではない。この教諭の熱意があったからこそその話である。職員会議を通ったあと東京都からもすぐに開講が認められた。このような設立経過とアジア言語であることから、中国語とハングルは外国語教科であるが、所属は国語科となった。

13. 日比谷高校ホームページ(<http://www.hibiya-h.metro.tokyo.jp/index.htm>)参照

14. この教諭は講座が軌道に乗ったのを見届けたかのように平成16年末に亡くなられた。筆者にとって恩師のような存在でもあった。

15. 東京都教育委員会では平成12年に海外修学旅行試行校(国際高校、飛鳥高校、蔵前工業高校)を定め、試行したのち平成17年4月に海外修学旅行を全面解禁した。

「韓国、北朝鮮のどちらにも偏らず、日本人のみならず、双方のどちらに関係する人でも気楽に受講できるようにしたい」。筆者も講座名については教諭から何度か相談を受けたが妙案はなかった。韓国語・朝鮮語・韓国朝鮮語・コリア語のどれもが一長一短あり適切でないと思われたからだ。結局、講座名はハングルとなった。ハングルとは韓国・朝鮮で使われる文字の名前であるが、NHKのラジオ・テレビ講座の名称を参考とした¹⁶。ただし、最初の年だけは東京都の指導で正式名称は朝鮮語で、ハングルは学校内での呼び方であった。

「一人しか受講者がいなくとも開講する決意だ」。最初の年は生徒が集まるか不安であった。筆者も授業を通じて生徒の募集を行い、さいわい中国語 11 人、ハングル 10 人の生徒が集まった。

「目先のことだけを考えれば無駄なことのように見えるが、10 年 20 年先には必ず何か実る」。この教諭が中国語・韓国語を開設したことについて国際文化フォーラムのインタビューに語った言葉である¹⁷。奇しくも平成 18 年度で 10 回分の講座が終わった。中国語・ハングルが始まって 10 年が過ぎ、あらためて高校で第2外国語を学ぶことにどういう意味があるのか、何か実っているのかを考える時期が来ている。

第2章 「ハングル」の授業はどう見られているか

日比谷高校のハングルの受講者数は年度によって増減があり、筆者が担当するようになった平成 13 年度からの受講者数は最大で 40 人（平成 15 年）、最小 7 人（平成 19 年）である。受講者総数は 107 人となる。多くの年度で他の 3 言語より受講者数は少ない。

生徒の立場からすれば、英語を学習している上に、「あえて」第2外国語も学習する。この日は 9 時間連続で授業を受けなければならない。

・ハングルがあるので日比谷高校に入ったのに、部活動に重なってとることができません。何とかありませんか。

部活動に入っている生徒は授業と部活動を天秤にかけざるを得ない。それだけに受講する生徒は何かを得ようとしているのだ。すでに学習を終えた生徒にも何かの「実り」があったはずである¹⁸。

その実りが何なのかを明らかにすることが、ハングル開設以来の流れを見てきた筆者の責任であると考えた。以下、これらの点を卒業生へのインタビューと生徒が受講時に残したアンケートを元にしながら考察する。

16. 南相理「NHK「ハングル講座」の成立過程に関するノート」(金沢大学教養部論集人文科学篇 32-1 (1994 年))参照

17. 詳細は国際文化フォーラム通信 35 号、平成 11 年 7 月参照

18. 部活動の上級生の勧めで講座を選択する生徒が毎年数人いる。

【生徒の志望動機の変化】

この10年の間に日本と韓国、北朝鮮を巡る状況は激変したといってもよい。それに合わせるかのように生徒の受講動機も大きく変わっている。10年前は北朝鮮、在日を含む政治的な関心、歴史的な関心を受講動機にする者も見られた。

- ・韓国語が一般的になるときだった。日本の俳優が韓国語を学んで取り上げられるようになった

平成13年頃からは日本の芸能人が韓国語を学んでテレビにでたり、韓国の芸能人が日本のマスコミに出るようになった。

- ・韓国はIT先進国だから
- ・韓国のPCバン¹⁹で遊びたい
- ・韓国はNIEs²⁰の一員だから

平成15年ころからはコンピュータや経済分野に対する関心を持つ生徒も出るようになった。平成14年のサッカーワールドカップの日韓共同開催を前後して韓国の情報量が飛躍的に増えたことも大きい²¹。

- ・エステなどに関心があるし、韓国映画を少しでも聞き取りたいから。
- ・韓国人の友達と話せるようになりたい

「韓流ブーム」は高校生にさほど直接には影響しなかったが、ドラマ、エステ、食など韓国の大衆文化に対する関心が高まり、韓国の友人と話したいという生徒もいる。

- ・友人に在日朝鮮人がいる

日本にある民族系の学校である朝鮮学校との交流など、身近な関心や経験で受講する生徒も増えてきた。

- ・国際関係の悪化した時こそ、国際交流することが大切だ

平成17年は日韓関係、日朝関係ともに悪化したがそのときの発言である。一方で最近の北朝鮮との関係を受けて、北朝鮮に関心をもって受講する者はほとんどいなくなった。このように韓国・北朝鮮に関する情報量や質の変化、国際関係の変化などに生徒が大きく影響を受けていることがわかる。

- ・言葉そのものの学習が楽しい
- ・英語のほかに違う言葉を学びたかった

日本語と文法構造が同じだと言うことに関心を持つ生徒も多い。

だが、多くの生徒にとってフランス語・ドイツ語・中国語と比べて文字への抵抗が大きい

19. PCバン：インターネットカフェのこと

20. NIEs：新興工業経済地域のこと。韓国、台湾、シンガポール、香港、ブラジル、メキシコ、アルゼンチンを指す。

21. 武井一「韓国語がかっこいい」（民団新聞 平成17年3月2日掲載）

ようだ。教科登録をする頃に1年生の教室を訪問して韓国語の話をしている。そのときに文字や言葉への抵抗を小さくするように話をする。

- ・実はこれ、覚えて使えるようになったらすごいんじゃない？

平成16年の受講者の受講動機である。このように思ってもらえたら本望である。実際受講生は訪問できたクラスから集まる傾向がある。40人集まった年は8クラスすべてで勧誘できた年であった。

- ・親や兄弟の薦めで決めた

これは中国語も同じようだ²²。かつて、ハングルを選択しようとしたら親の猛反対にあって中国語に変えたという生徒がいた。いまや隔世の感がするが、平成13年の受講者に同様のことがあったことがインタビューで確認できた。

- ・在日である母親のルーツを知りたかった。
- ・戦時中に強制連行された朝鮮人が掘った通路を見た。壁に書かれた「緑の春」という文字が望郷の念を込めたものだと思ったとき、泣きそうになった。

時代の変化にかかわらず本人の経験がもとになることも多い。

【授業の進め方】

ハングルは他の外国語と同じく、韓国語の指導に留まらず文化理解も科目の目的となっている。もちろん、韓国語の学習が主だが、語学の学習とその言葉にまつわる文化理解は深い関係にある。

語学

そもそも生徒は語学に関心があって集まってくる。モチベーションも高く授業は進めやすい。それだけに授業の進め方が大切になる。

- ・少し文字や単語を覚えてただけで楽しく、人に話してみたりもした
- ・文法の息苦しさはなかった。生きた言語を学べた

最初の数年間は会話を重視していた。英語に苦手意識を持っている生徒が、韓国語を勉強して少しでも会話をすることによって「通じた」という体験をし、自信を取り戻すことができるという観点からである。しかし、今では生徒の状況を見て文法的要素も増やしている。語学の授業に対する生徒のイメージもあり、そこからかけ離れた授業をやってもうまくいかないことに気づいたからである。

前期の授業は文字の習得と、簡単な自己紹介ができることを目標にしている。文字が習得できるかどうかはその後の学習意欲に大きく影響するからである。

- ・記号遊びのようで面白かった

22. フォーラム2006における参加者の発言より(国際文化フォーラム通信74号 2007年4月参照)

ハングルは記号を組み合わせたような文字であるため、読みは分からなくとも記号の順序が分かれば辞書は引けてしまう。そういう生徒が意外に多いことに気づき文字の読みも重視するようになった。

後期の授業は、辞書を使って簡単な文章が読めるようになることが目標だ。簡単な文章を読むための文法的な内容も重視している。

- ・なんだ、日本語とほとんど同じじゃん

これらの作業を通じて、韓国語と日本語の文法構造が似ていることを実感する生徒は多い。そして記号のような文字に抵抗をなくす生徒もいる。もちろん、そのような授業の進め方に対する疑問もでる。

- ・文法中心の授業をうけたかった

残念ながら文字の習得がうまくいかなかったり、語学の難しさを感じて終わる生徒もいる。

- ・やっぱり言語の勉強は難しいとつくづく思った

文化理解

文化理解の授業は適宜行っている。教材には写真、ビデオ、絵本²³などを利用している。夏休みには、身近なハングル(文字)を探してくることや、東京の新宿や赤坂のように韓国からのニューカマーの多い地域と、同じく三河島、上野のように在日の多い地域をそれぞれフィールドワークして比較させる課題を出している。

- ・ハングルで書かれた看板、標識が想像以上に多いことに気づいた

このような感想が毎年のように書かれる。後期には映画(12月、2月)、韓国料理(12月)、韓国人ゲストを呼んでの自己紹介(2月)なども行う。

- ・1年間を通じて印象に残ったのは、ゲストを招いた発表授業だった。在日韓国人が、そういう立場の人にしか分からない複雑な感情を語ってくれた。普通に暮らしていたら考えもしないことだ。自分の視野を広げるのに本当に良い機会になった

ここ数年は、韓国語がかなり話せる在日韓国人にゲストをお願いしている。ゲストを通じて韓国のこと、在日のことが自然に意識できるようにしている。

- ・韓国は物価が安いとか、食べ物がおいしいとかのイメージしかなかったが、在日韓国人と話したりするうちに考えが変わった。日本と韓国の間には複雑で悲しい歴史があることも認識できた。そういった歴史に目を向けていかなければならない

朝鮮半島との関係は、過去の歴史や在日のことや韓流ブームなどさまざまな形での関わりがある。それらの関わりについて正面から取り上げるのではなく、それとなく素材を出すことにしている。あくまでも言葉が軸だからだ。

23. 韓国では近年、伝統的なものをモチーフにする絵本が多く出版されている。

【韓国の何に関心が向いたか】

ここからは受講者のインタビューで聞いたことを紹介したい。それらを基礎として次の章で分析を行う。まず、韓国の何に関心が向いたかである。受講前よりも韓国に対する関心がより強くなるが、その力点を 語学、 社会、 歴史・文化などに分けてみた。一人で複数の力点を話す者もいた。

語学

- ・韓国語に限らず、言語の発音そのものに関心を持つ
- ・英語に比べて韓国語が日本語に近いことがわかった。単語を置き換えれば日本語になる。中国語も同じと思って挑戦してみたがそうはいかなかった

社会

- ・韓国へ行くきっかけになった
- ・韓国に対する理解も深まった
- ・韓国のイメージが変わり、それまでの漠然としたものから具体的なものになった
- ・夏休みの課題のときに韓国人の店に入って食事をした経験から、韓国人は思ったより友好的な人たちだった

歴史・文化

- ・語学と文化の関係を考えた。ただの語学でなく、こういう人たちがこのような言葉を話すということ
- ・さらに朝鮮史を知りたいと思うようになった

【ほかの科目の学習に役立ったことはあるか】

ハングルの学習が他の科目に役だったか聞いた。大きく 英語・外国語、 国語・日本語、 地歴・音楽に関して語ってくれた。

英語・外国語

- ・コミュニケーションをとるときに積極的に話せるようになった。単語レベルで話せばよく、文法的に完璧でなくともよいことがわかった
- ・英語の発音（L.Rの違い）とか、音のつながりや抑揚に関心が向くようになった
- ・日本語と外国語の発音のしかたがかなり違うことを意識するようになった。
- ・会話を重視するようになった。それまでは書くことや英検の準備が中心だった
- ・英語が語学の基礎と思っていたが、そうでないことがわかった。それまでとは異なった文法構造を持つ言語に出会っても驚くことはなかった
- ・韓国語で学んだ子音の発音が、大学で選択した中国語にも同じようにあったため、学習しやすかった

国語・日本語

- ・日本語の言い回しや日本語に対する興味がでた。日本語はおろか日本のことも知らない気がついた
- ・日本語にも文法のあることがわかった。それまでは当たり前すぎたのだ。文法だけでなく正しい日本語、単語の使いかたに気をつけるようになった。不得意だった古文の科目も理解できるようになった
- ・文法構造の相違に関心を持っていて、無意識のうちに日本語と韓国語を対比することで、日本語の構造を見直せた

地歴、音楽

- ・世界史の学習で、一般の人があまり関心を持たない朝鮮史に関心を持つことができた。中国史も朝鮮半島との結びつきを意識して学習した
- ・それまで地歴科に関心がなかったが、世界史で学ぶ世界の文化の違い、宗教的な違い、背景に興味を持つようになった
- ・予備校で朝鮮史を終えたとき、物足りなくて先生から資料を分けてもらった
- ・韓国の国楽などの民族音楽に関心が出てきた。尺八などにも関心が出た

地歴・公民で世界史に集中したのは、大多数が世界史受験だったためである。これらの分野は多くの生徒にとっては関心をもちにくく学習しにくい分野である。

【こんな気づきがあった】

他にハングルの授業を受けて気づいたことを自由に語ってもらった。かなり多岐にわたった。

- ・物事の表面上のことだけでなく、その背後にあることや、そこから派生することも多いことに気づいた
- ・韓国のことと比較して日本のことを知らないことに気づいた
- ・日本が世界とつながっていることに気づいた
- ・自分の物の見方が狭かったことに気がついた。それは自分が正しいと思っていることが正しいのではなく、正しいと思っているだけだったことに気づいた
- ・今までは韓国という国家のニュースしか目に入らず、具体的な韓国国内に関係するニュースには関心が向かなかった。同じ韓国に関係しても竹島などの日韓問題と、個人の在日を同じものとしてとらえないことが大切と思うようになった。東アジアに関するニュースにまで関心が深まった。日本が外国からどう見られているかが気になるようになった
- ・日本語で雨の言葉が豊富だったり、韓国語で「さようなら」が2種類になること、スペイン語で「I love you」にあたる言葉が、あなたがほしいとなるように、各言語で他の言語では意識しないポイントがあることがおもしろい

第3章 第2外国語がきっかけで関心が広がった

第2章で紹介した受講生の感想や意見をもとにその背景を考えてみたい。

【韓国語・韓国そのものへの関心が広がった】

- ・高校で習ったことが活かせる
- ・もっと文法をやりたいかった
- ・大学に講座がなかった
- ・ドイツ語で本を読みたかった
- ・専門でスペイン語・古典ギリシア語・ラテン語を学ばなければならなかった

大学でも韓国語の学習を継続する者は多い。講座がない場合もあるが、自分の目的のために他の言語を選択する者もいる。

- ・履修はしなかったが韓国へ行ったときに片言の韓国語を使って喜んでもらえた
- ・アルバイト先の接客で韓国人に韓国語を使い喜んでもらえたとし、韓国語の接客マニュアルを作るよう頼まれた
- ・大学の授業で終わらなかった部分を自習しようと思う

韓国語の学習と韓国語を大学で履修したかどうかは関係ないようだ。履修したかどうかにかかわらず韓国語とのつながりを残している者もいるからだ。

- ・韓国のイメージが漠然としたものから具体的なものになった

韓国そのものに関心を持つ者も多いが、受講前と受講後ではその質が大きく変わる。

「韓国」という抽象的な国や食についてのイメージであったものが、1年間の学習によって具体的な社会や個人に目が向くようになる。

- ・キムチや焼肉が好きだから。

受講したときはこの程度しかなかった韓国のイメージも豊富になった。

地理でも政治経済でも韓国が関係するテーマはでてくるが²⁴、それをきっかけに韓国に関心が向かう例はほとんど耳にしない。ハングルの授業は韓国語という言葉が軸となるため、言葉と結びついて具体的な韓国に関心が向きやすいのだろう。授業の中でとりあげた文化にまつわる話題に関心を持つ生徒も多かった。

【英語や日本語にも新しい気づきがあった】

- ・高校の時英語は苦手だった。会話をしたかったからだ。ハングルも語学で苦手になった。しかし大学で外国人の先生に英語で話をするのは楽しい。

24. 地理Bでは「近隣諸国研究」で韓国が取り上げられることが多い。政治経済は領域の問題のところで関係する。

生徒は基本的に英語がある程度できるし、本人なりの学習方法も身につけている。語学の授業に対するイメージもある。学校の性格から受験を意識した構成となっているため、会話を重視したい生徒にとっては授業に対して苦手意識を持つことがあろう。だが本人は無自覚でも語学そのものに関心はある。

- ・英語が語学の基礎と思っていたが、そうでないことがわかった。異なった文法構造を持つ言語に出会っても驚くことはなかった

ハングルの学習経験を通じて語学に関して新たな「発見」をしている。「発見」は「自覚的な気づき」としてもよいだろう。

- ・英語に比べて韓国語が日本語に近いことがわかった。置き換えれば日本語になる。

日本語と同じ文法構造の言葉があることを「発見」し、語学が英語だけでないことに気づく者も少なくない。日本語と英語の二項対立でないことの「発見」である。英語について意識が向くだけでなく、その意識は日本語にも向けられている。

- ・日本語の現代文も文法的に考えられるようになり、不得意だった古文の授業も理解できるようになった

無自覚だった日本語の文法の「発見」によって、それまで苦手だった古文が勉強しやすくなった事例である。さらにそれまで無頓着だった日本語の言葉遣いにも関心が向いたという。言葉に関する新たな「発見」が、日本語をも見直させることにもなった。

生徒の意識の中に英語や日本語も言葉の一つに過ぎないという言語の相対化が生じた。知識としては持っていた日本語と韓国語が同じ文法構造であるということが、読解の作業などの体験を通じて具体的な意識に変わった。その自覚が、それまでの語学のイメージと違ったものを発見させ、英語や日本語などの言語を相対化させたのだろう。

【関心が広がるだけでなく、足下の日本にも目が向いた】

韓国などへの関心が、韓国にとどまらずさまざまな分野に広がる生徒も多い。

- ・日本が世界からどう見られているか気になるようになった

ハングルの授業を受けたことがきっかけで韓国関係のブログを覗いてみた。その内容を見ているうちに、日本がどのように見られているか気になるようになったという。

このような気づきは年齢的に社会的関心が広がる時期であることも関係していると思う。社会的関心が広がったためにさまざまなところに関心がでたのか、ハングルで学んだことが関心を広めたのかは本人にもはっきりしないと思うが、多くの人がハングルに結びつけて話してくれた。

- ・自分の物の見方が狭かったことに気づいた

同じ教室にいた人が韓国について見方が自分と違うことに気づいて驚いたが、相手の物の見方がおかしいだけでなく、自分の物の見方もおかしいのではないかと思ったという。

一方で、本人は自覚していないが、無意識のうちにその人の世界が広がっていることもある。

- ・各民族のこだわりの違いが言葉に表れていることがおもしろい

無意識のうちに「ことば」と「文化」の関係に関心が向いている。

ハングルの学習を通じて物事の背景に関心が向き、それらがさまざまな形でつながっていることを「発見」した。そして、すべてのものが同じようにさまざまな形でつながっていることに気づく。

- ・世界史の文化的な違い、宗教的な違いや背景に興味を持てるようになった。それはハングルの授業で国ごとに違うということに気づいたからだ

これだけ明確に認識している人はそれほど多くないが、世界史の学習において他の地域より朝鮮史を意識する者は多い²⁵。

- ・歴史の細かいことは覚えていないが、なぜか金属活字²⁶や訓民正音²⁷は覚えている

朝鮮の歴史そのものに関心を向けるだけでない。

- ・もともと日本史は好きだったが、朝鮮との関係は気にもとめなかった。受験のために日本史を勉強しているときに朝鮮と日本の関わりが多いことに気づき、大学では朝鮮と日本の関わりをテーマにしたいと思った

音楽に関心を持っている者が、韓国の民族音楽だけでなく、世界の民族音楽や邦楽に関心が向かうように、それぞれ何に興味を持っているかによって関心の広がり方は多様である。

- ・日本語はおろか日本のことも知らない気がついた

関心は広がるだけでなく日本をも見つめさせた。多くの人が日本に触れている。受講生の中には関西出身者もいる。日本の中でも地域による違いが大きい、そこまで意識して話す者はいなかった。しかしながら、いずれも自民族中心主義²⁸で日本を見ているのではない。いろいろなものとの関わりの中で日本を相対化している。英語や日本語を言語として相対化していくことと同じようにである。

【言葉を知ること、その国の文化に親近感がわいた】

- ・調理実習の味が懐かしく、時折韓国海苔を作って食べている

英語の授業でも文化に触れるが、国際語としての英語教育の場合、世界の文化を網羅的に教えるわけではない。かといって英語圏の文化に限るわけでもない。いろいろな国の文化

25. 教科書の同じページのベトナム史のことを尋ねても、ほとんど覚えていないという返事だった。

26. 金属活字：高麗時代に世界で最初に金属で鋳造したとされる活字のこと。

27. 訓民正音：1446年に制定された朝鮮文字のこと。ハングルの原型。

28. 自民族中心主義：エスノセントリズムとも言う。自民族の文化尺度を基準として他文化を判断することである。対義語は文化相対主義。

を扱うため生徒はイメージを絞りにくい。それに対してハングルの授業で扱われる文化は朝鮮民族の文化、それも朝鮮半島の文化にほぼ限定される²⁹。

- ・ フィールドワークのついでに韓国料理を食べた。テンジャンチゲ（韓国風味噌汁）を味噌汁と思って食べたらずいぶん違っていた。

日本と韓国の文化は一見するとよく似ているため、かえって違いが際だつ。テンジャンも味噌も大豆の発酵食品で見た目もよく似ているが、麹や製法の違いのために味がかなり違う。器への盛り方や食べ方も異なる。似ているようで違うのだ。

- ・ 言葉を知ることによって親近感がわく

異文化理解を授業のテーマとして正面からは扱っていないが、そのことがむしろ生徒の印象をより強め、関心を引き出せた。歴史などについて授業で正面から扱うと抵抗感を持つ者が出てくるが、それは思想的なことだけではない。正面から扱うことが心理的な拒絶につながることもある。

かつてあるクラスで世界史と政治経済を2年連続で教えたことがある³⁰。そのクラスに通名を使っていた在日韓国人がいた。その生徒は韓国・朝鮮に関係することになると授業中でも教室から飛び出してしまった。韓国・朝鮮という言葉を知ること自体がダメだったようだ。現在は民族名を名乗って活躍していると聞いているが、そのころは精神的にいろいろ悩んでいたと後から聞いた。

- ・ 純粋な語学なら語学学校へ行けばよい

多少乱暴なような気もするが、言葉を通じた文化学習の与える意味を示唆している。ハングルの授業では生徒が言葉に関連するものとしての文化という意識で聞くためか、抵抗感も少ないのだろう。だから言葉を知ることからくる親近感が言葉以外のさまざまな世界へ目を開かせていくのだ。

【なぜ世界が広がったのか】

インタビューの内容の分析を通じて高等学校で第2外国語を学ぶ意義が見えてきたように思う。

大多数の高校生にとって、第2外国語は高校で初めて接する科目であり、フィールドワークはじめさまざまな課題学習、韓国人ゲストとの交流などがある。座って聞くだけの授業でないことが印象に残ったのだ。しかも高校時代だったことが大きい。

初めての科目だったから

- ・ 3年次で受講した政経は中学校からのイメージもあったが、ハングルは初めてだっ

29. 他に中国朝鮮族、旧ソ連ウズベキスタン、カザフスタンなどの高麗人など本国の文化と異なった文化を持つ者も多い。

30. 日比谷高校は2年次と3年次はクラス替えをしない。担任も基本的にそのまま持ち上がる。

たから印象に残る

ハングルの授業はそれまで受けたことのない初めての科目であった。それまで学校で英語は学んでいるが、それ以外の言語に体系的に触れる機会はほとんどなかった。高等学校普通科で学ぶ科目は中学校までに学んでいる科目の発展である。それらの科目については何らかのイメージを持っている。

- ・「ハングル」という単語そのものを知らなかった。これは何なのかと思って受講した。すぐに見たことがある文字と言うことはわかった。それまでその文字は韓国とは結びついていなかった。韓国では「こんな文字を使っているのか」と驚いた

はじめて触れた印象深さと驚きを雄弁に物語っている。中学校に入学したとき、それまでに経験しなかった英語にとっても大きな関心を示す人は多い。しかし、文字は小学校の時にローマ字として学習しているし、目にする機会も多い。ハングルは今でこそ目にする機会が増えたが、つい数年前まではその機会は少なかった。文字も含めて全く初めての科目なのだ。

自分自身が関われる授業だから

- ・ただ聞いただけの授業より自ら参加したもののほうが印象に残る

ハングルの授業は、会話練習や実習、課題活動などのように自分自身が参加しなければならないことが多い。インタビューをした者の中には筆者の「地理」「政治経済(政経)」も受講した者もいたが、三者とも授業への関わり方は異なる。

- ・地理のフィールドワークが印象に残る
- ・言葉で伝えるのみの地理よりハングルの方がインパクトは大きい
- ・政経は受け身になりがち。ハングルは聞いたり話したり、意味を想像することが面白かった

地理は1年次であるため、高校での学習態度を作ること意識して授業を行う。それまでの暗記中心の学習では高校では対応できないからだ。そのために生徒に考えさせるアプローチも重視している。フィールドワークや調査などをしなければならない課題学習も多い。それに対して、3年次の政治経済は講義中心である。

聞いただけのことは忘れるが、自分で考えて経験したことはしっかり記憶に残るといわれる。ハングルの授業は自らが参加して関わる人が多い。地理は自分たちで行動しなければならない面があるのに対して、政治経済はそれがほとんどない。その違いが科目に対して与える印象に違いをもたらしたのだろう。

受験に関係ない科目だった

- ・受験のための言語でないし、気分的に楽に入っていた。
- ・受験に関係ない科目だから、自由に勉強できた。自由に勉強できるということは、

適当ということではなく、受験という目的に縛られずに自分の関心に従っていく
らでも勉強できるということだ。

受験に関係ないから適当でよいということではない。受験勉強は目標があるために、学習すべきことが自ら決まってしまう。それに対してハングルは受験に束縛されないから、自分の関心に従って自由に学ぶことができる。生徒にとってハングルの授業は、「勉強」ではない「学ぶ」ことの楽しさを実感できる数少ない機会なのかもしれない。

高校生だったからハングルをとった

・高校生だからハングルをとった

青年期中期とも言われる高校時代は、精神活動が急速に成熟する時期である。青年期前期の中学校の時に芽生えた抽象的、論理的な思考能力が一層発達して「社会的関心も本格的なものとなる」³¹。1年次を担当するときに考えさせるアプローチをすることは、それまでの暗記中心の学習では、論理的思考を要求される地歴・公民の授業にはついて行けなくなるからである。また、同じ政治経済でも1年生と3年生では理解の深さが異なる。科目の性格から講義中心であるが、1年生の授業の方が身近な例を使ったり、考えさせるよう工夫している³²。それでも1年生の方が表面的な理解である。

高校時代は心理的成長に伴い「具体的生活の次元だけでは飽き足らなくなり、新しく拡大してきた世界の中に生きがいを求めるようになる」³³。世界を作るためにはさまざまな経験が必要となる。

・あまり韓国のことを知らず単に「先輩たちがとても楽しそうだった」という理由だけで習い始めた。文字が読めるようになったり文化を知ったりするたびに、どんどん韓国に興味をもつようになった。授業が終わるたびに確実に何かを身につけている自分がいて、楽しく充実した1年だった。

1年間の授業が終わったときに書いてもらった感想である。ハングルの授業で語学以外にいろいろなことを取り入れているのは、さまざまなことに出会ったときに考えられる素材を提供しているつもりだった。しかしそれは受講生の世界を作るための素材だった。

・いろいろなことをやりたかった。第2外国語もその一環だった。大学生になって、初めて韓国語を受講したらと言われてもやらなかっただろう。専門分野の勉強を深めるようになってきたから。しかしながら高校の時にいろいろなことをやったことが専門を深めるのに必要だった

高校と大学時代の心理的な違いをよく表している。青年期後期の大学時代は、精神的にも

31. 斎藤耕二、加藤隆勝『高校生の心理』（有斐閣双書 昭和56年）2頁

32. 都立三田高校でも平成18年度まで政治経済、現代社会を中心に教えた。カリキュラムの変動によって学年は変わったが、ほぼ1年次配当であった。

33. 斎藤、加藤『前掲書』3頁

安定して青年から成熟した大人になる準備をする時期だからである。

・人間形成においていろいろな機会のあったとき

高校時代がそのような時期だったからこそ、受講者の世界が広がった。しかも受験を意識しない教養科目であるため、それまで抱いていた教科学習のイメージとは異なるものであった。その異質さが、それまでの学習のイメージに対してあらたな「発見」をもたらした。

「基礎基本を大切にするとともに、教科活動を通じて人はどうあるかを教えること」。筆者がかつて勤務した第四商業高校で教頭から言われた言葉である。後期中等教育である高校の教育の目的はその教科の専門家を作るのではない。教科の活動を通じて生徒の人格形成に資することである。それはどの科目でも違いはないが、第2外国語、しかも受験科目でない科目に「初めて」触れたことが大きな意味を有する。

まとめ - 生徒の関心を広げる触媒としての第2外国語 -

日比谷高校でハングルを受講した卒業生へのインタビューを中心に生徒の目線から第2外国語教育の持つ意味を考えてきた。印象的なことは、広範囲に生徒の関心が広がったことである。いわゆる「進学校」では第2外国語は「受験に役立たない」とか、「英語もできないのに第2外国語なんか…」と言われがちだが、事実はむしろ逆である。教養科目であるため受験勉強に直接役立たないように見えながら、実は通常の学習活動を背後でしっかり支えていたこともわかった。

・ハングルがまるで「触媒」のように自分の世界を広げていった

「目先のことを考えれば無駄なことのようには見え」ただけなのだ。その効果は「10年、20年を待つこと」もなく十分に発揮されていた。ハングルを受講した影響が、目先の受験勉強だけではなく本人の視野も広げているからだ。これこそ講座を開設した教諭が内心で願っていたことであった。

単にハングルを受講したということだけでない。「高校時代にハングルを受講したこと」の意味が大きい。高校時代の経験はその人の人格形成に大きく影響するからである。日比谷高校が第2外国語を受講する機会を与え続けてきたことは、生徒からすれば自分を成長させる機会の一つが与えられたことなのだ。

第2外国語という未知の世界に初めて触れたことが刺激となって、まるでそのこと自体が化学反応における「触媒」のように種々の「発見」をひきおこし、事物を相対化させた。高校での第2外国語は単なる「もう一つの語学」でない。語学を通じた「生徒の関心を広げる触媒」である。第2外国語は英語と同じ語学科目ではあるが、教養科目という点で性格が違う。そのことを生徒ははっきりと意識していた。

ここまで高校における第2外国語の存在意義について、ハングルを中心に考えてきたが、同じことは他の言語でも言えると思う。韓国語は日本語に文法構造が似ているため、言語

を相対化させやすい面はあるが、何語であっても日本語を言葉として相対化することはできる。どれも英語・日本語と同じではないからである。フランス語・ドイツ語の文法は英語に近いが、名詞の性や格変化、形容詞や動詞の使い方など英語とかなり違う。中国語もそうだ。アルファベットや漢字も英語や日本語のそれと異なる。

ただ、日比谷高校の第2外国語の言語に限って言えば、ドイツ語・フランス語・中国語は政治、経済、文化などさまざまな側面において社会的な位置づけが高い。それに対して韓国語の社会的な有用性はこれらの3言語ほどは認められていないように思われる。昭和50年代と比べればその地位ははるかに高まっているが、それでもその地位は不当に低い。中国語やフランス語などの有用性を説く生徒はよく耳にするが、韓国語についてはほとんどない。そのことが受講者を集める際の壁ともなっている。

だが、このような壁を乗り越えて韓国語を学ぶ生徒にとって、その壁がある種の「てこ」の役割をしているのではなからうか。そのために、これだけの振り返りができたといえる。

本稿の出発点は、第2外国語を学ぶ意義は「もう一つの語学」だけにあるのではないということであった。そのことは受講生のインタビューで証明された。受験勉強で余裕がない生徒が多いように見える「進学校」でのことである。

教養科目としての第2外国語が他の受験に関係する科目と異質であるということが、その効果を受験のみならず、社会に出てからもさらに広げていく。そのような第2外国語がより多くの学校で置かれることを期待してやまない。条件の許す限りなるべく多くの言語が置かれたほうがよいが、その中に我々の生活している日本の文化、日本語に近い性格を持つ韓国語も含まれることを期待する。

その際、選択必修のようにして第2外国語を全員が履修するのではなく、自由選択として生徒の負担の少ない学年を選び、生徒の欲求に応じて受講させることによって、モチベーションの高い生徒を集めることができる。このような生徒ならば「負担が大きい」と感じることは少ないだろう。